

旅行案內

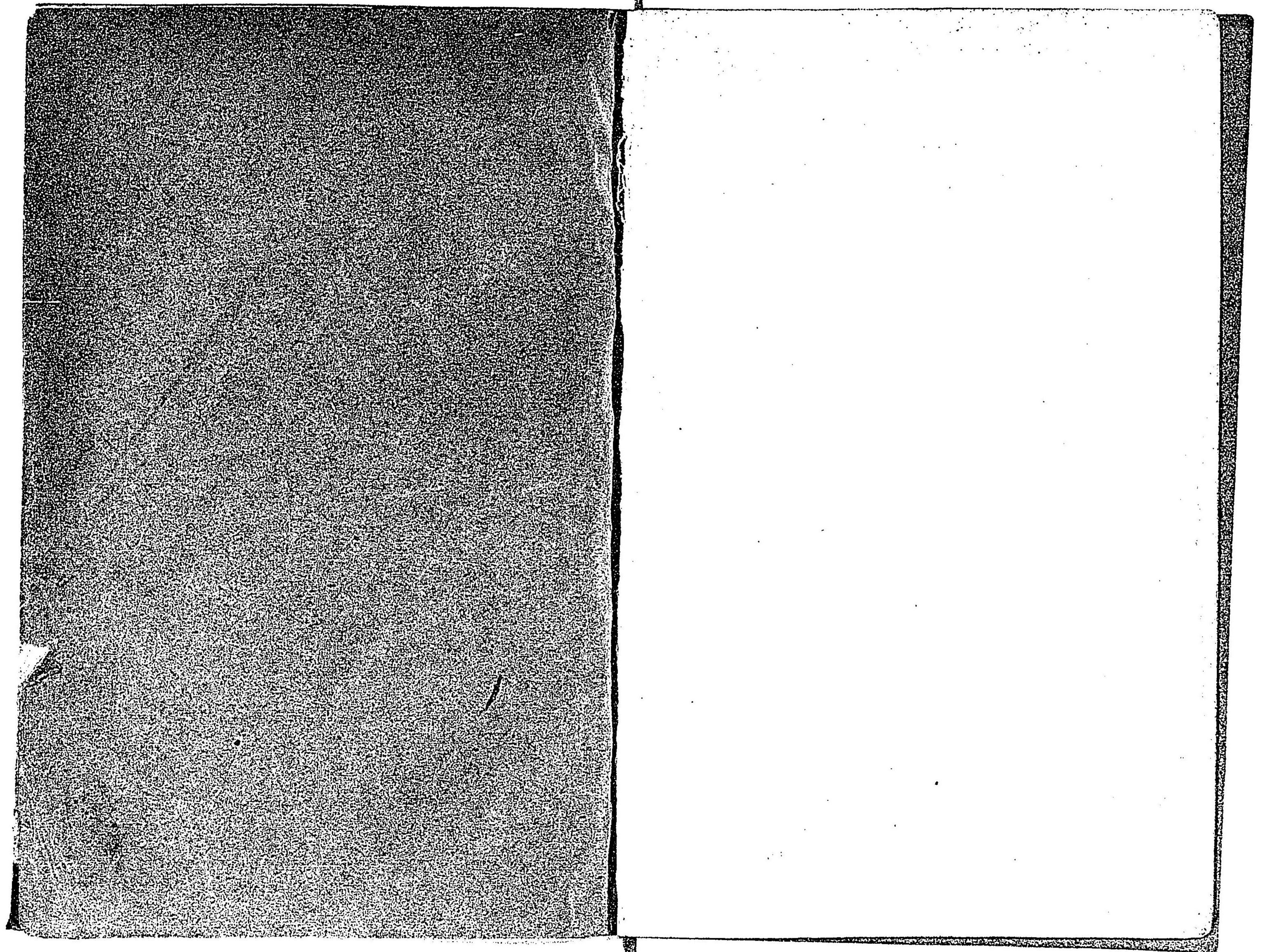
94
306

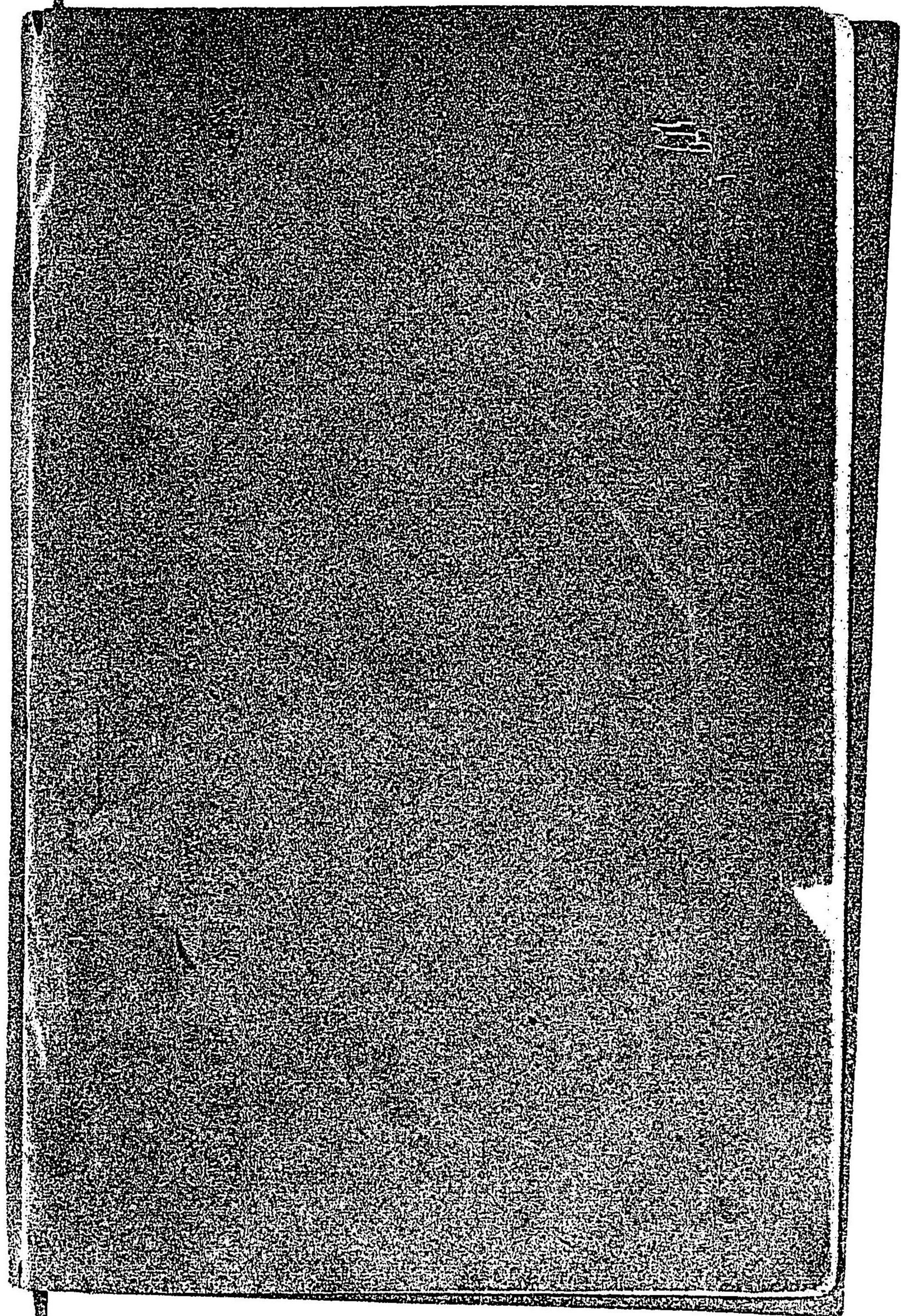


華嶺子著

木曾風光

諸式用達商會發行

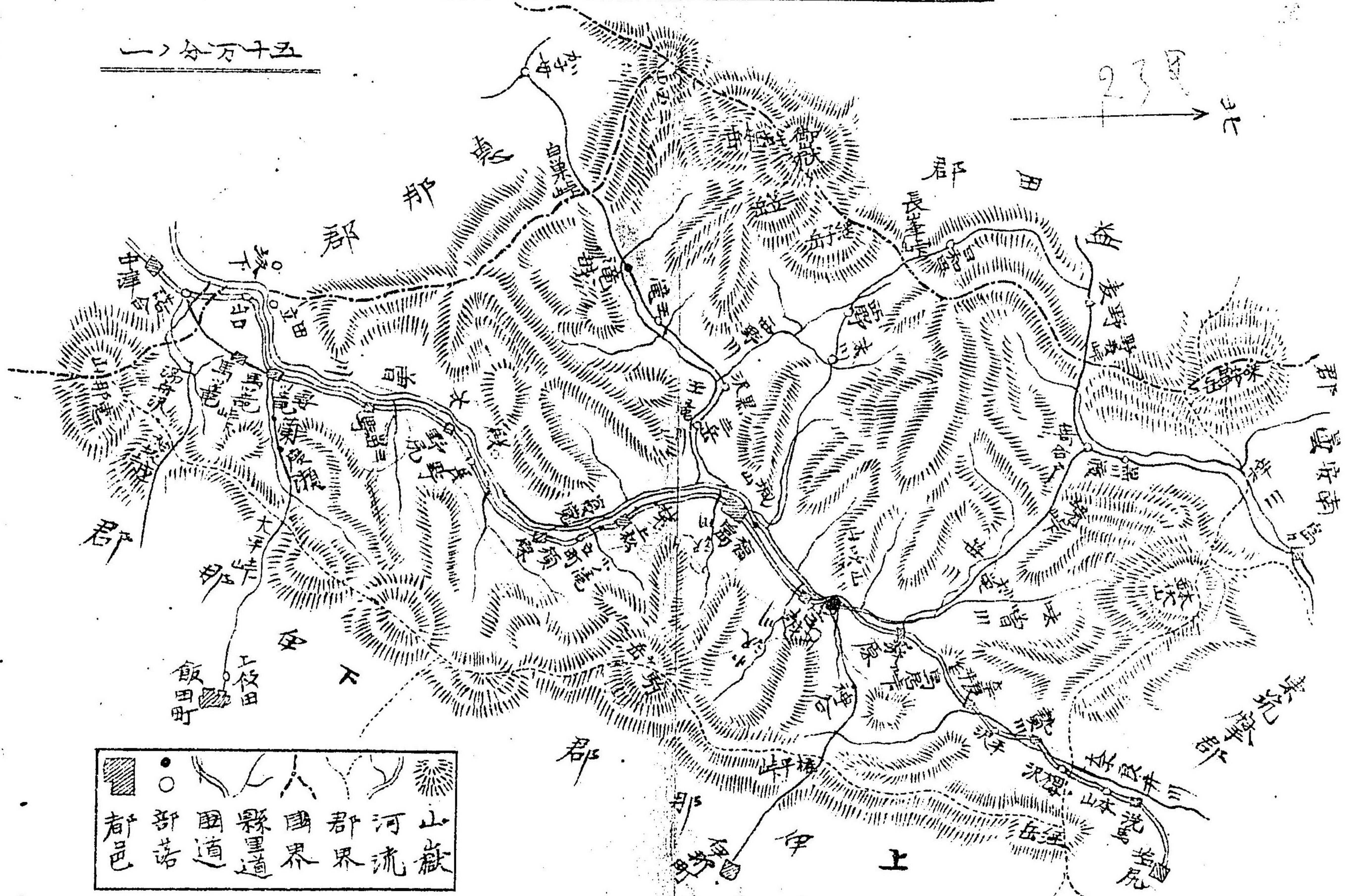




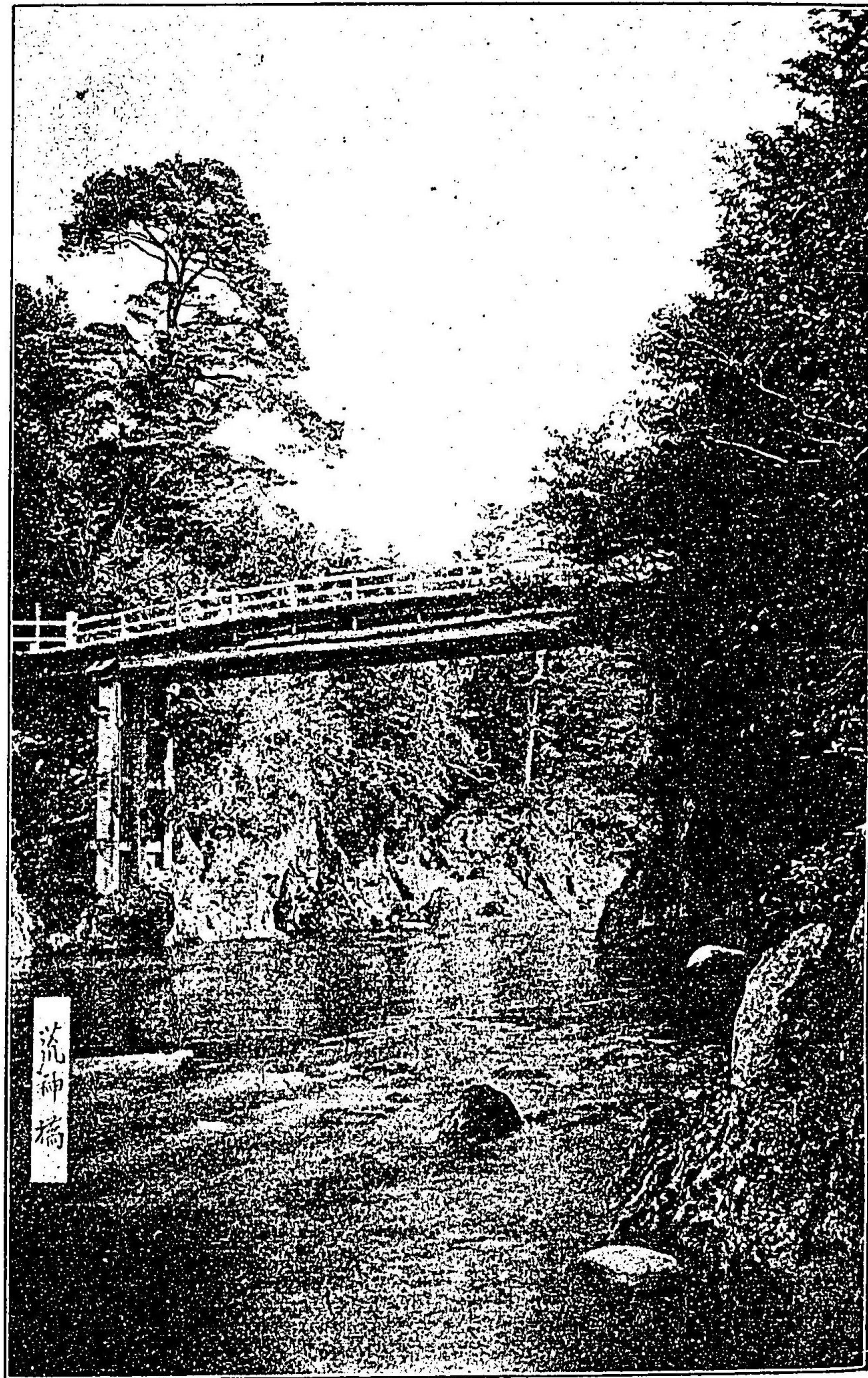
西筑摩郡全圖

一、分万十五

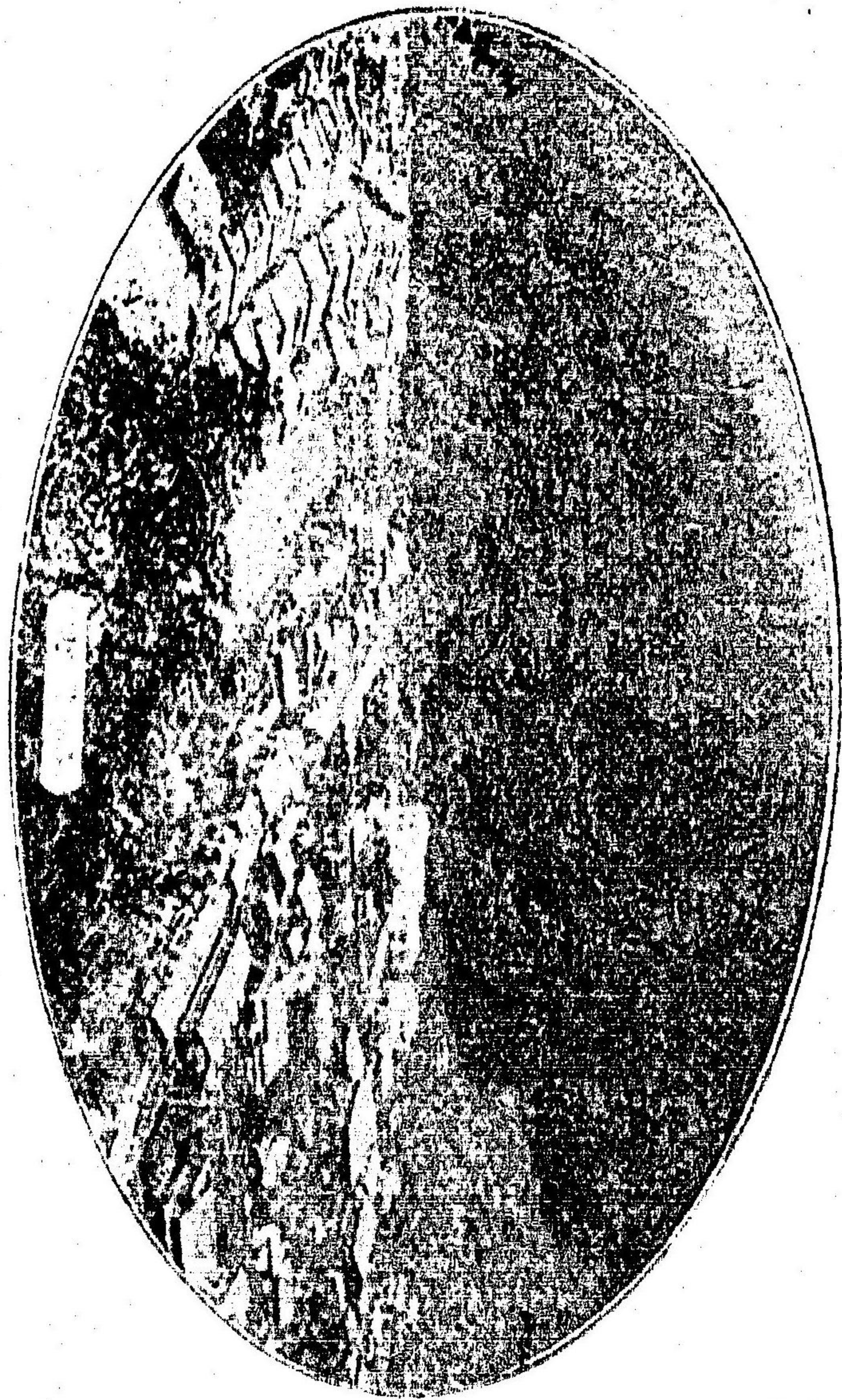
23月
北







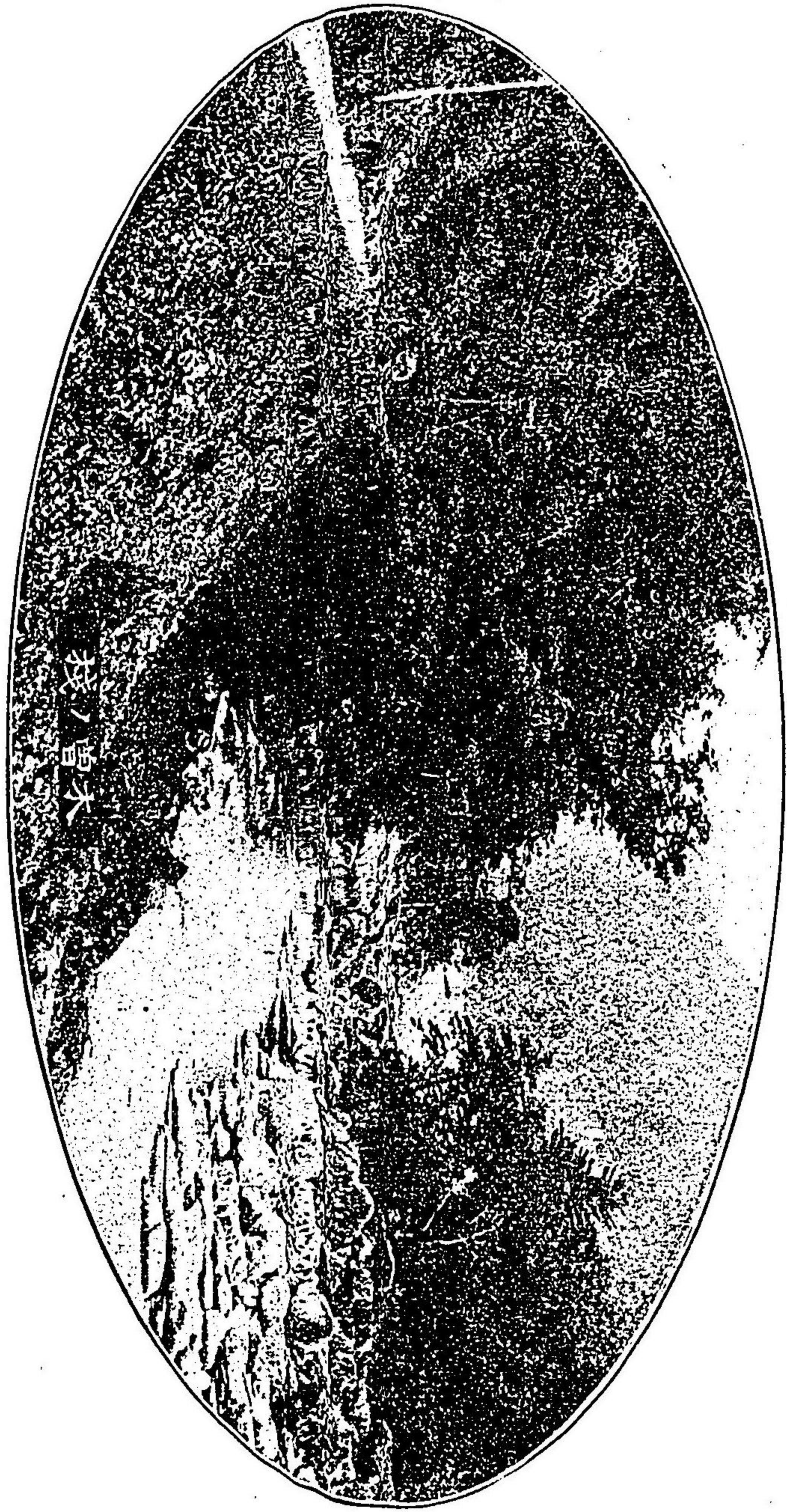
流神橋



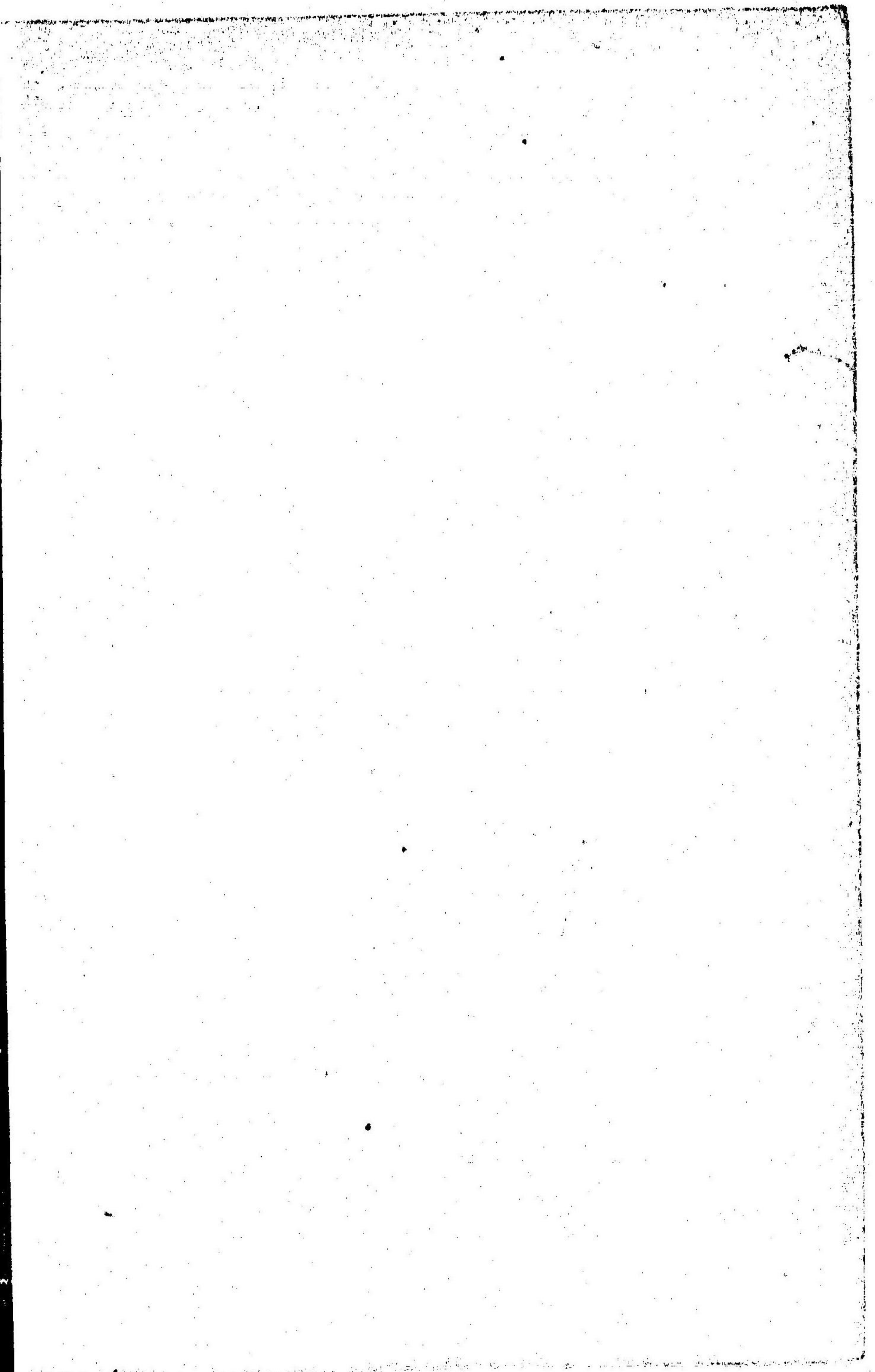


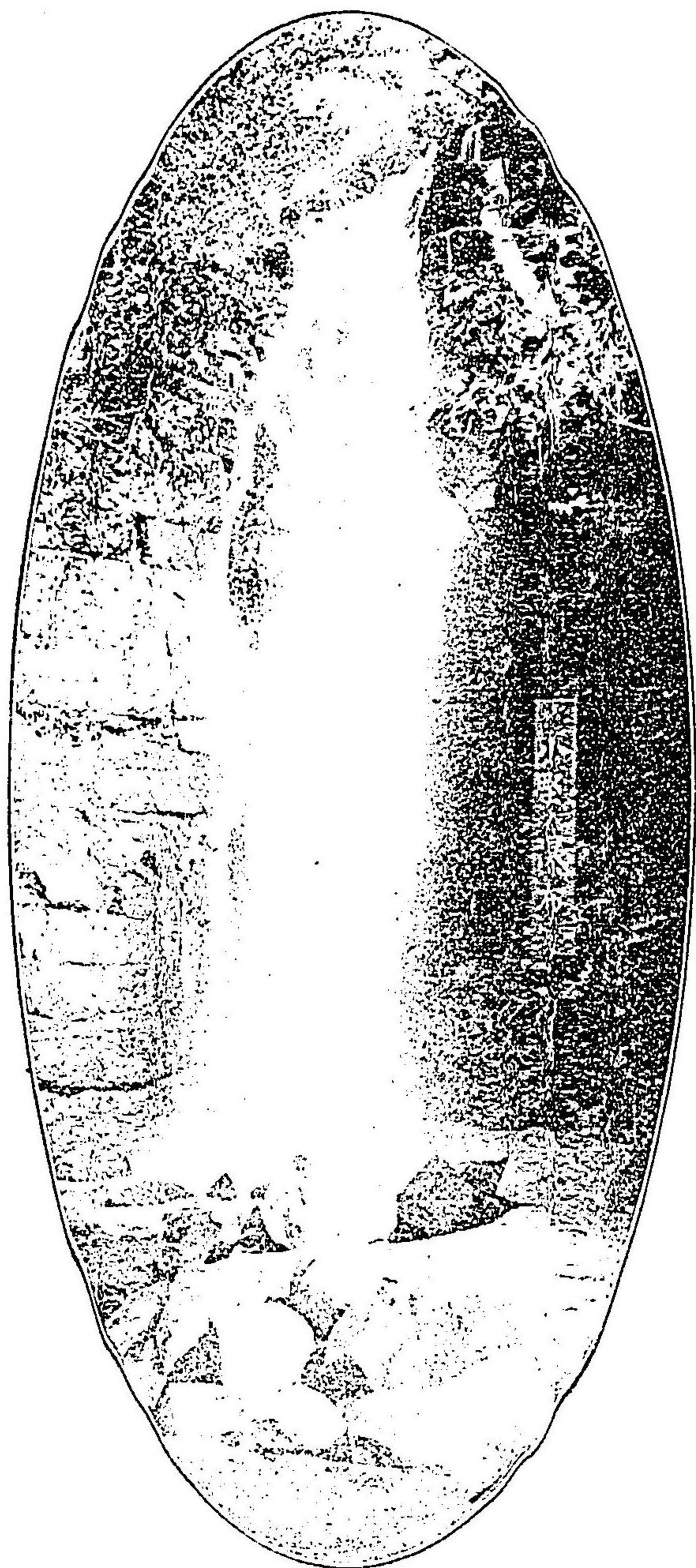
望遠山觀御

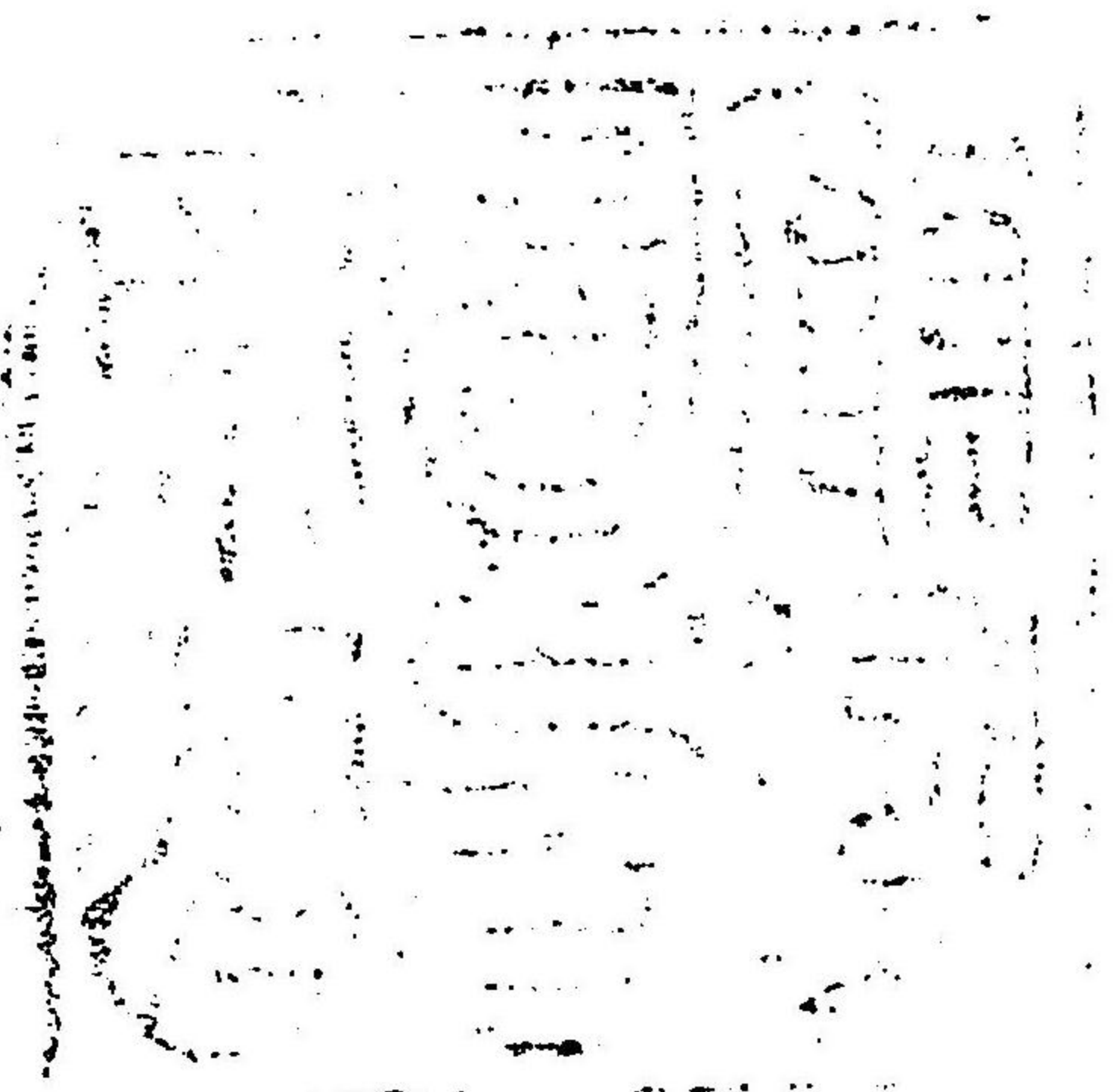
[Blank page]



木曾川

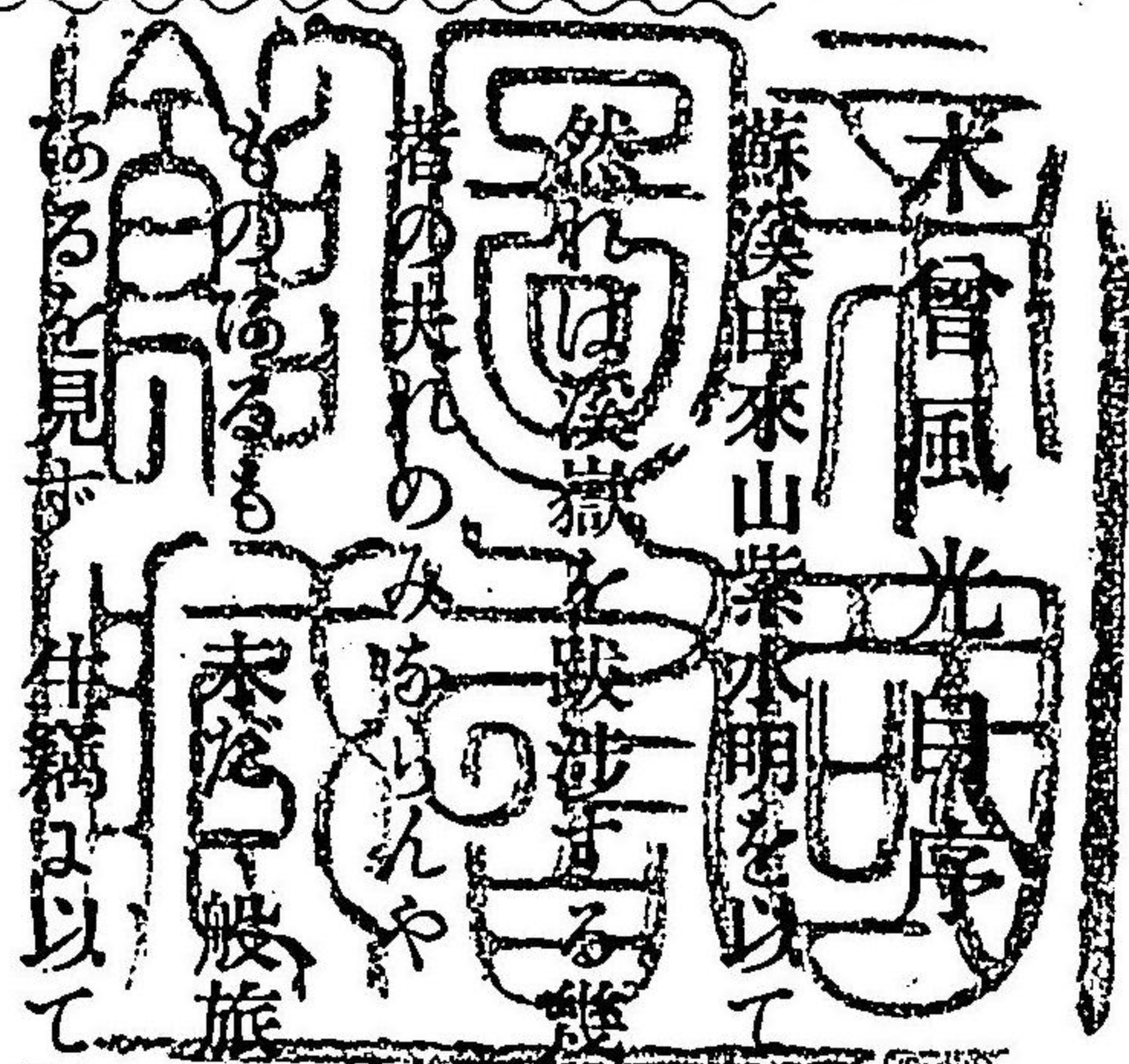






木 曾 風 光

一



蘇美由來山業水明を以て著はれ 是が名勝舊蹟亦乏しとせず 25
 然れは溪嶽を跋渉する者多れ文人雅客亦寥からず 豈御嶽登山
 指の扶れのみありんや 而して遇々是等名士に紀行文を接する
 ものありとも 未だ一般旅行者の爲め 所謂旅行案内様のもの
 あるを見が 枉稿を以て恨みとす 此種は編蓋し無用の業ふ非
 ざるを信ず 然りと雖も生の不文 加ふるは僅々數日の餘暇を
 以て倉卒稿を脱せしもの 其疎漏誤謬等乃多々なる 元より免
 かれざる所 觀者夫れ之を宥せ 唯憂ふ生が拙筆 徒ら木曾
 け山靈水伯をして 憤らしむるを 時當は録蔭地は満ち 夏物



よ人可あり 要は是等幾多遊客の爲めよ 聊かたりとも攀渉れ
東道者たらは以て足れり

甲辰初夏

編者識

木曾風光目次

三	光	風	曾	木					
					總論	一	境嶺	一六	
					櫻澤	五	奈川村	一七	
					贊川	七	野麥峠	一八	
					平澤	八	宮越	一八	
					渡澤瀧	八	宮越城址	二〇	
					奈良井	九	樋口兼光館	二一	
					奈良井川	〇	今井兼平邸址	二二	
					諏訪明神社	一	木曾宣公舊里碑	二二	
					鳥居嶺	一	德恩寺	二三	

四

南宮神社	二四	義仲の墓	三四
巴 潭	二五	古城址	三四
山吹山	二六	城 山	三五
權平峠	二七	長福寺	三六
明星巖	二八	大手橋	三七
七笑川	二九	福嶋關址	三七
義仲元服松	三〇	福嶋の産物	三八
荒神橋	三一	八 澤	四〇
福嶋町	三二	木曾の漆器	四〇
興禪寺	三三	水無神社	四二

光 風 曾 木

五 光 風 曾 木

千代田の湯	四三	水ヶ瀬	五三
御嶽華表	四四	鞍坡瀑布	五四
末川西野	四四	瀧 越	五五
長峯嶺	四五	木曾棧道	五六
御 嶽	四六	上 松	六〇
三笠山	四八	駒ヶ嶽	六一
御嶽神社	四八	寢 覺	六四
王 瀧	五〇	寢覺床	六四
王瀧川	五一	臨川寺	六七
岩戸神社	五二	滑 川	六八

六	木	音	風	光
風越山	小野瀧	立町	須原	定勝寺
.....
六九	七〇	七二	七三	七四
妻籠	蘭	大平嶺	田立	山口
.....
七八	七九	八〇	八〇	八一
			馬籠	湯舟澤
		
			八二	八四
			神坂越
		
			八六	

七	木	音	風	光
	木曾八景	木曾五木	木曾森林	木曾風景論

	八九	八九	九四	九七

附錄

木曾風光

總論

木曾とは西筑摩郡全部をいふ 信濃國西南隅に位し 東は上下

伊那二郡に接し 西は飛彈益田郡美濃惠那郡に界し 南亦美濃

惠那郡に隣り 北は東筑摩及南安曇の二郡に連る 廣袤大約東

西七里 南北廿三里 面積百十四方里 戸數七千六百卅七 人口

四萬三千六十七を有き 地勢高隆にして千峯萬嶽四境を圍繞し

郡中亦山陵蜿々起伏せざるあし 其西北に聳ゆるものを御嶽と

なす 飛彈國に跨り海面を抽くこと一萬百廿八尺信州第一の高

華嶺子編

木曾風光

一

峯となす 其南に繼子嶽 北に繼母嶽 東に聳立して一支峯を
なすものは三笠山にして直立七千五百八十尺 郡の東上伊那郡
界に峙立し御嶽と相對するものは駒ヶ嶽にして 海面より高さ
こと七千八百八尺 兩山共に四時白雪を載き餘脈左右に延き南
に寶劔嶽 北に經ヶ嶽と起す 其中央一大溪澗をなし木曾の谷
と稱するもの即ち是 木曾川其中央を南北に貫流し 古の所謂
仲仙道岐蘇路あるもの亦此に在り 木曾川は郡の北境鉢伏山に
源を發し 上流を味曾川と稱し 木祖村に至りて笹川を合せ始
めて木曾川とある 福島町岩郷に於て御嶽より流下し來る王瀧
川を合せ水量頓に増加し西南に下り 美濃に入り伊勢桑名に至

りて海に注ぐ 水源より國境に至る延長二十里なり
木曾の谷は 文武天皇大寶二年始めて之を開き 古は美濃國に屬
せしが 其後元慶年中信濃國に合併せり 明治の初年は名古屋藩
下に隸し后ち名古屋縣となり 筑摩縣となり 明治九年八月より
長野縣管轄地たり 今之を分割して十六ヶ町村となす 檜川
木祖 日義 新開の四ヶ村は東北に據り 奈川 開田の二ヶ村は北
に界し 王瀧 三岳の二ヶ村は西に連り大桑 讀書 吾妻 神坂
山口 田立の六ヶ村は南に亘り福島町 駒ヶ根村は其中央にあり
木材並に馬は本郡著名の産物にして木材は四十万町歩の廣大な
る山林を控へ馬は木曾駒の名あり 其他檜細工 櫛 漆器 蕨粉

等は名ある産物あり

○

鴨 長 明

出づ嶺入る山れ端の近ければ

木曾路は月の影ぞみしかき

○

源 頼 實

雲もあや下に立ちけるかけはしの

はるかに高き岐蘇の山道

○

黒 田 清 綱

さをしかの聲にまじりてから衣

打つ音寒むし木曾の山里

○

淺 井 冽

峰はあをく水はみどりに岩こゆる

なみの花しろし木曾のやま川

岐蘇道上作 入 江 兼 通

似入褒斜谷 崎 嶇 山 幾 重

臨溪過險棧 認 路 冒 危 峰

亂石灘聲轉 深 林 樹 影 濃

今宵何處宿 隱 々 隔 雲 鐘

櫻 澤

中仙道本山驛より日出塩を経て櫻澤といふに至る 檜川村の北
端にして 木曾路に入るの始め 櫻澤橋は即ち東西筑摩郡の分
界橋なり

○ 青 嵐

春ほさみ風なやほるゝさくら澤

波のはなのみ立ちさわぎつゝ

○ 浅 井 列

櫻澤さくらもさかず風さえて

贅川奈良井みそれふるなり

贅川にせがわ

檜川村にあり中仙道驛次なり 往昔熱川に作る 中世火を去り
貝を従ふ 里老の言によきは古温泉あり故に熱川と曰ふと 又
驛の東を北流する奈良井川は中古まで 一の宮諏訪の神事へ
楚割鮭を贅に供したるより贅川と云へるが 遂に所の名となれ
るありと 旅舎よ坂本屋、奥傳あり

○ 青 嵐

君が爲め身となきものにえ川の

きよき流れを汲む人やたれ

平澤
贊川より奈良井に至る驛路中に在り 檜川村役場を此地に置く
漆器は此地の名産にして 福島八澤と共に其名高し 年産額平
均拾萬圓を下らず 旅舎に瀧澤あり

渡澤瀧

奈良井驛の北奈良井橋附近にあり 驛路に接せざるが爲め 今
迄多く人に知られず 巾六尺高さ四十尺の小瀑布に過ぎずと雖
も 雅致尋常ならず 没すべからざるものあり

奈良井

一に檜井に作る 東山道驛次本山を去る五里 鳥居峠の東麓に
在り 驛中東西八町相對して巷を成す 塗櫛は此地の特産にし
て 年産出四萬五千圓に達すと謂ふ

寺院に大寶寺 長泉寺 雲松寺 法然寺 淨龍寺 專念寺等あり其
數の多き他に冠たり 蓋し現時に於て當地に過ぎたるもの、一
に計へらる 奈良井郵便局在り 旅舎に徳利屋 越後屋あり

○

青

嵐

ながさてのすえやいかにとなる川

岸の岩根の松にとはや

青によしならの木かげに清水汲む

うなゐをとめよなが名のらさね

○ 去るものはうとくなる世のならる川

きみぞす里はよきて流れよ

奈良井川

水源を駒ヶ嶽に發し 檜川村川入かわいりを経て流下し來り 北流して
東筑摩に入る 其下流を犀川と名づく 信濃川の上流なり

○ 三 條 公

五月雨に山越え來れば奈良井川

水音高く河鹿かじか鳴くなる

諏訪明神社

檜川村平澤に在り 文武天皇大寶二年の創建なれ共後天正十年
木曾武田兩氏の鳥居峠に交戦するや 武田軍火と縦ち 祠を
焚き舊記を亡失し 事實を傳へずといふ

鳥居嶺

中山道奈良井 藪原 兩驛の間に横はれる峻嶺なり 木曾 奈良井(犀川上流)兩川の分水嶺にして 古は岐蘇の御坂と稱し 項上に御嶽神社の遙拜所あり 華表を建つ依て嶺の名とす 天正十年木曾義昌武田勝頼と隙あり 義昌歎を織田信長に通ず 勝頼大に怒り典厩信豊をして木曾を攻めしむ 信豊兵と率ひ奈良井に至る 義昌軍を出し山下に合戦す 信豊敗走す 勝頼又今福筑前守をして木曾を攻めしめ 亦此地に挑戦し今福敗走す 信長父子師を師ひ甲州に至り 武田家を滅す是其初戦あり 嶺項に鳥居嶺碑を建て後世に傳ふ 兩驛の間舊道一里半 今や羊腸たる新道を開鑿し里程甚だ延長す

○

芭

蕉

雲雀ウツクより上にやすらふ嶺たうげかゝる

○

青

嵐

千はやぶる神のみたけにゆふかけて

○ 咲くや鳥居の山ざくら花

○

雲雀より上にやすらふ旅人たびとの

うたはのきこゆ峰のしら雪

藪原はら

鳥居峠より瞰下すれば 右の方谿谷より長蛇の如く南に奔走するもれは木曾川なり 川の東岸に在るを藪原驛となす 中仙道の驛次にして 藪原郵便電信局あり 新道は驛の上丘を通過す 北に木曾川水源地なる鉢伏山を望み 東北に鳥居峠 南に神谷峠を控え 東西は一帯の山脉連なり恰も筐底の如し お六櫛は此地の名産にして(塗櫛は奈良井にて産し藪原は木櫛を産す)櫛毎に之を鬻ぎて生活す 住民の三分の二は此業に従事し 年産額平均三萬圓に上ると云ふ

藪原 小木曾 菅を合せて木祖村と稱せ 小木曾は飛彈に通ずるの要途に當り 菅に名醫あり

旅舎には 米屋 一の瀬 大つたや あり 極樂寺あり法城山と號す 臨濟宗にして京都妙心寺派に屬す 古畑十右工門の建つる所にして 茂林和尚を以て開山と爲す 熊野神社其傍らにあり 一村の産土神なり 近年改名して藪原神社と稱す

○ 甲 山

○ 五月雨に賢かしこかりけり旅たびあわせ裕

○ 五月雨の宿に櫛引く響かな

○ 青 嵐

草まぐら旅寝のゆめぞむすひうき

木がらしすきむやぶはられ里

○

小夜深けて櫛引く賤のころすなり

ゆふぐれはやき藪はらのとと

境 嶺

小木曾より飛彈街道奈川に通ずる要路にして 木祖村奈川村の

境あり 故に名とす

境峠を越ゆれば 奈川村字寄合渡よりあいどにして 旅舎勝山あり 奈川

郵便局又茲にあり

○

信濃なるさかいのたふけ風あれて

ろのふり分くる峯のしら雪

奈 川 村

西筑摩郡最北に位し 北は東筑摩郡 南安曇郡に接し西ハ飛彈

と境す 山に依り谷を隔て幽僻の地たり

蕨粉 蕎麥は此地の名産なり

黒川山中に温泉あり 頭痛に効ありと云ふ

○ 山ふかみ春も奈川のさと人は

ふりつむ雪を花と見るらむ

野 麥 峠

奈川村より 野麥峠を経て五里 飛彈國益田郡高根村野麥に達す

宮 越

藪原より南二里日義村に在り 中仙道驛次なり 古へ宮腰みやのこしに作る

義仲の遺跡日義村を以て 最も多しとす

宮越郵便局を設く

旅舎には 若松屋 とありや 海老屋等あり

宮の越を過ぎて

甲

山

義仲の幼なまみの時鳥ほご、まきす

○

青

嵐

日義城邊夕陽傾き

徳恩寺畔暮鐘鳴る

行客徒らに古人の碑を吊して 訪はず今雄蘇溪に在るを

○

狂風雪を捲て天地暗く

峰轟き谷應へて巖飛はんと欲す

怪み見る將軍古城の下

幽魂尙ほ拔山の威を震ふ

宮越城址

日義村宮越驛の東端にあり 一名を山吹城と號し 里人其地を
 を呼んで宮原と曰ふ 治承年中朝日將軍木曾義仲の本城なり
 當時義仲牙城を妻籠野尻の二ヶ所築き 野尻城は今井四郎兼
 平として 之を守らしむ 城址は木曾川の南岸に在りて 今と
 田圃と變じ 傍らに入幡宮の小祠あり 史に仁安元年柏原八幡
 宮に於て元服すとあるもの 之あり

○

青

嵐

矢さけひのこゑもあとなき松が根に

むかしを照らす弓とりの月

○

袖ぬらす木々のしづくぞいやしけき

あわづが原のつゆをおもへは

○

名にしおふ朝日の影もさびしげに

照すや君がおくつきところ

樋口兼光館

宮越驛の南に在り 其地大樹多し 樋口次郎兼光は中三權守兼
遠れ長子なり 世所謂義仲四天王の其一人あり

今井兼平邸址

宮越城趾の東隣に在り 今井四郎兼平は兼遠の次子にして 義
仲四天王の一人あり

木曾宣公舊里碑

宮越驛の東端 中仙道路左側に大なる石碑あり 是れ木曾宣公
舊里碑なり

德 恩 寺

宮越驛の北端木曾川を隔て、 字德恩寺にあり 臨濟宗妙心寺
に属し 日照山と號す 開基年月を詳にせず 壽永年間の創建
なり 本堂には地藏菩薩を安し 境内薬師堂 十王堂 巴御前
の墓等あり 別に義仲の位碑を藏め 牌面に開山朝日將軍義仲
宣公大居士の文字あり 木曾義仲及樋口兼光 今井兼平の畫象
三幅と以て寺寶とす

○

あがれゆく木曾の川波かぎりなき

あわれをそふる鐘のおとかな

南宮神社

宮越驛の東方城地に在り 村社にして 金山毘古命を祭り 日
義一村の産土神なり 境内凡そ四百坪 樹木鬱茂し 晝猶暗く
幽邃の境なり 社前に小流ありて之に石橋を架す本社 拜殿共
に白木粗造にして 見るに足らずと雖も 土地の幽雅なるに至
ては 木曾山道の神社に冠たり 社は大なる巖のもとに在りて
幾千歳を経たりけんと覺ゆる檜杉多く生茂りて空を掩ひ さゝ
やかある水其社の前を流れて御手洗となれり かうくしと言
とん方なり

巴潭

宮越驛の北山吹橋の傍 昔巴女の居りし所の下にありて 木曾
川の深潭たり 此邊大石多し 傳へ曰ふ巴女幼時礫を投せし所
なりと 或は深潭の水巴形に流るゝを以て呼へるなりと

○

うきしづみさだめなき世のさまみせて

ともゑが潭にちるさくらかな

巴が潭の少く下流に當りて 木曾川水中に巨巖の直立するも
のあり 巖上翠松の稍々大なるものを生ず 初め岸と連続せし
ものが 多年木曾川の水流に浸蝕せられ 巨巖のみを遺せしも

のと察せらる 恰も人工により成立せるが如く 眞に奇景と謂
つへし

山吹山

宮越驛の北に在り 山吹女の栖めりし所ありと

平家物語に云ふ

義仲有_二妾一_一曰_レ巴 一曰_レ山吹 元暦之戦山吹

有_レ疾留_二干京師一

源平盛衰記に云ふ

義仲有_二妾一_一曰_レ葵 二曰_レ巴 皆善戦葵戦_二死干

砥浪山

二説同じからず 或は山吹は齋藤別當實盛の女ありと 其孰れ
が是なるやを知らず

新道木曾川に架せるを 山吹橋と稱す 此處より徳恩寺に通ず
る舊道を 山吹横手と呼ぶ 秋季紅葉の景得も日はれず

○

名にしおふ山ぶきよこて花ちりて

こがねあや織る木曾の川波

權平嶺

日義村北端越尾より 木曾川を渡り全村宇神谷を経て 伊那諏訪に通ずる道路にして 縣道權平街道と謂ふ 日義村より七里六町にして 上伊那郡伊那町に到る

○
いそのかみとしふる杉はうづもれて

そのかみやともとふ人のあき

明星巖

中仙道原野^{はらの}抜過ぐれば 木曾川西岸上に在り 巨巖山頭に屹立する數丈 遠近之を望むを得べし 夜明の明星此岩に没すと因

て名とす

○
いかあらんころの奥もいわがねに

消えをまつまのゆふづゝの影

七笑川

日義村原野の南上田と接する所に小澤川あり 日義新開兩村の分界をなす 一に七笑川と謂ふ 今國道七笑橋を架す 水源を駒ヶ嶽に發す 四境皆花岡岩に係るを以て 川は流域は殊に風化水蝕の作用を受け 夕陽殘照と相映玄 茲に眞成の白沙を

成し 青松其間に點綴して 海道ならざるに所謂白沙青松の風景を現す 加ふるに東方駒ヶ嶽の夕照を望むべく 西方御嶽の暮雪を觀るべく 橋は黒く 石は白く 松は翠みどりに 水は碧 誠に絶景と謂ふ可し

傍の茶店に於て 七笑の酒といふを嚙ひさぐ 蓋し味林の一種あり

義仲元服松

新開村字上田の西に 權守兼遠の宅址あり 今田圃と爲る其林中古松樹一株有り 呼んで木曾義仲元服松と云ふ 然れ共今や枯れ僅かに古幹を存するのみ

○

はかまぎの松に夕日の影落ちて

やしきが原はたゞ秋のかせ

荒神橋

木曾川の西新開村に荒神社こうじんあり 境内老杉古檜鬱蒼たり 上田の生土神なり 神社に通ずる橋を荒神橋と稱す 熊澤の溪流木曾川に合する所にして 水鳴り山應へ 奇岸怪石凸兀として 大小樹木川の兩岸に密生し 頗る幽邃の境とす

福島町

宮越より一里三十町中仙道の驛次にして 郡中第一の名邑なり
 長野縣廳を距る三十三里 市街は木曾川を挟みて南北兩岸に跨
 る 人家櫛比し戸數九百 人口五千餘を有す 西筑摩郡役所
 警察署 稅務署 區裁判所 御料局木曾支廳 郵便電信局 木
 曾山林學校 福嶋小學校等の建築物あり 神社佛閣には 興禪
 寺 長福寺 大通寺 しょうたくいん 勝澤院 久昌院 がんぎょうじ 願行寺 西方寺 了源
 寺 金刀比羅神社 御靈神社 水無神社等あり
 昔木曾義仲の幼時 中原兼遠の據りし處にして 其子孫木曾氏
 と稱して 世々茲に據守せり 徳川氏の始め木曾氏斷絶し 其

老臣山村良勝代官とあり 慶長五年徳川秀忠西上の時嚮導の任
 に當り 後尾張侯に属し其子良充に至り 命せられて關門を守
 る

木曾川の北一帯を向城むかいじょうと呼ぶ

旅舎に 葛屋 岩屋 田中屋 俵屋 益田屋 富屋等あり

○

さきにはふ花のさかりにながむれは

風もいろある福島のこと

興禪寺

福嶋町向城に在り 臨濟宗にして萬松山と號し 京都妙心寺に
屬す 嘉吉年間木曾式部少輔信道の創建に係り 大華和尚の開
山なり 寛永十八年災有り古證文等烏有に歸し 只伊豫守義昌
朱章一通を存す 什物として朝日將軍義仲公及四天王肖像三幅
太夫坊覺明の書一幅あり 堂宇宏壯なり

義仲之墓

興禪寺境内に在り 古形の碑に朝日將軍源義仲公墓と刻す

古城址

興禪寺の西に木曾義康の古城趾あり 前に木曾川の清流を擁し
後ふ一堆の丘陵を負ひ 一見して當時要害の地たりしを知る
に足る 義康は左京太夫義在の子にして 須原より城を此に徙
し 天正年間武田氏織田氏と交戦拾餘年の長きに渉るも 能く
防きて敗を取らず 後信玄と婚を結ひて和を講せりといふ

城 山

古城趾一堆の丘陵を城山といふ 福島驛西北にあり 御城山と
呼ぶ 常録 落葉の諸樹鬱蒼として富源を蓄へ 夏は深緑滴ら
んとし 秋は紅葉燃ゆるか如く一段の風光を添ふ

○
ほのくらき城やま松のしたかけも

春はさくらのうす明^{あか}りして

長 福 寺

福島町向城にあり 臨濟宗にして 京都妙心寺に属す 龍源山
と號す 永享二年木曾源太郎豊方の創建に係り 笠徳和尚を以
て開山と爲す 文錄三年四月廿二日回錄に罹り 古證狀等烏有
と爲るといふ 什物として木曾殿鞍二具 馬鞞二具あり

大 手 橋

福島町廣小路より 向城に通ずる橋梁にして 筏橋^{いがたばし}は其川上に
在り 其他近邊の橋梁には 行人橋^{きょうにんばし} 福島元橋^{もとばし} 黒川橋等あり

福 島 關 址

福島町の入口左丘岡に接し 右木曾川に懸崖を控ゆる所 往昔
關門のありし所と云ふ 東山道第一關にして 東海道箱根 荒
井二關と全しく 關東に要を扼すと爲す 關門は山村氏世々之
を監せり 今此處を關町と呼ぶ

福嶋町産物

木會駒 木會諸村の牧馬産する所の駒 毎三歳に至り牽て福嶋
 よ來り 其品題を受け之を四方よ鬻く 毎歳七月一日より
 三日乃至七日間 馬市を福嶋町に開く慣例なり 之を毛付
 と稱す 需めんとして集まるもの 伊那郡 安曇郡 より遠
 く 岐阜 愛知の隣縣よりし 當時市中の雜沓 言はん方な
 く 山中れ都 時ならぬ繁華を極むと謂ふ
 奇應丸 木會の名と共に其高名なる 奇應丸は本家 高瀬を最
 とし外諸店にて之を製造し 四方に産出す 其奇効を奏ま
 るを以て 販途全國に普ねし

百草 腹痛の名薬百草は 御嶽と共に其名高く 福嶋に於て販
 賣するものあれ共 主として登山者の爲めに 王瀧に産す
 るもの 夥しとす
 魚類 魚類には種々あれ共 中にて 赤魚あかうを 鰈かじか 岩魚いりな たぢひ
 ら 最も名あり 木會大河並に諸溪澗に産す 河鹿魚かじかは大
 河岩石の間に産し 鯨魚の類にして長さ三四寸あり 善く
 鳴き其聲甚だ清亮愛すべきなりと謂ふ
 鳥類 木會の焼鳥やきどりと稱し 食膳に供せられ 最も賞味せらるゝ
 もの 秋季至る處の山嶺に於て 鳥屋こやを設け鳥網こあみを以て一
 時に多數を捕獲す つぐみ あとり を主とし 直ちに焼

鳥となし 或は漬鳥 罐詰等となし保存す
漆器 八澤の條に述べたり

八 澤

福嶋町の西端八澤川の南に在り 福嶋町にて産する漆器は此處にて製す 年産出額四萬圓以上に達し 檜川村平澤と共に其名顯はる

木曾の漆器

木曾は群山重嶺の間に位し 交通不便にして 商業の繁盛を望

みかたぐ 又農耕すへき田畑に乏しきが故に 生活の根據を農業以外に求めざるへからず 然れば漆器と云ひ 木櫛と云ひ 天然の良材を利用せる 工産物の夙に此地に發達せるは自然の結果にして 今日に於ても此等の工業は 生活根據として最も適切あるものあるへし 木曾乃山林は良材の無盡藏を以て世に著はれ 加ふるに多量の漆汁の近郡に産するあり 林野又廣漠 漆樹の栽培に適するものあり 之に由り是れを觀れば 漆器の製造に於て既に優勝の地位を占むるや明かなり

然れば今日に於ては 技術尙幼稚にして 其名廣く世に著はるゝに至らずと雖も 將來進んで製品の種類を撰擇し 素地製方

に注意し 塗方及塗部屋を改良し 製漆法を研究し 更らに進んで一致團結販賣組合を設立し 販路の擴張を圖らんには 堅牢廉價の特長によりて 着々他の地の製品を壓倒し 實用漆器界に雄視するに至らんこと 期して待つべきあり

水 無 神 社

八澤川を浜り左方伊谷いやに在り 福嶋町村社にして高照姫命を祭る 弘安二年沼田右馬頭家中の創建に係る古神祠にして 境内老樹鬱蒼として 一團の森林幽邃閑雅乃仙境あり 毎年七月二十二三兩日祭典を行ふ

千代田の湯

八澤川の上流伊谷の川上と云ふにあり 新湯とも云ひ福嶋町を距る約一里 沸し湯にして赭褐色を呈し 流麻質斯に効ありと云ふ 風景の佳なる所なれば保養として入湯の客多し

○ 青 嵐

にひ墾ひりの山路はるけきすべらきの

○ 千代田のみやに朝けぶり立つ

川かみに桃のはあちる春の夜は

○ 月の影汲め伊谷のをとめ子

御嶽華表

福嶋町字岩郷驛路の右に在り 石を以て之と造る御岳遙拜の地なり

末川西野

共に開田村にあり 御岳の麓にして土地一体に平行あり 福嶋町を距る五里 蕪菁は木曾諸谷に産すれ共此地のもの最も名あり 西野川は一名栗尾川と稱し 御岳に發し下流黒澤に於て王瀧川に合す 西野に西野郵便局あり

○

青

嵐

つらち折る西野をとめをなつかしみ

一夜ぬにけむかやのかりふき

○

はあちるや駒のいはぬはさやかにて

たて髪かすむ春のすゑ川

長峯峠

此峠を以て飛州の界と爲す 開田村西野より二里半にして 益田郡高根村字小日和田に達す

御 嶽

信飛の國境に聳ゆ 西筑摩郡より飛彈益田郡に跨る 西筑摩郡
王瀧村 開田村 三岳村の三村に屬す 海拔一萬百二十八尺
信濃第一の高山なり 全岳輝石 安山岩より組成し 玻璃石
角閃石を交ふ 嶽に御嶽神社を祭るを以て毎歲夏季間之に登る
もれ多く 參詣の盛なる富士山に譲らす 中仙道福嶋若くは上
松より登るを最も利便とき 福嶋より登れは一日間にして上下
し得 上松より登れは一日間にては困疲するを以て 岳中「タ
ノ洞」の小屋に一宿し 翌旦絶頂に登るを可とす 頂邊に火口
五個あり 火口は大概破壊缺損す 然れども其中「三ノ池」と稱

するは最も完全にして摺鉢形をかし周圍一里に及ぶ 飛彈に向
へる一部は懸崖にして 其の半腹より蒸氣と硫氣とを噴出す 頂
には四時雪あり 小祠を鎮し 御嶽神社奥院(大己貴命を祀る)
と云ふ 里宮は嶽麓字黒澤にあり縣社なり 舊歷六月十二十三
を大祭日とす 頂より四望せは北西に加賀の白山 能登半嶋を
認め 北に立山の連山 鎗ヶ岳 乗鞍岳を看る 皆白雪皚々と
して山頂を被ふ 北東に淺間の噴煙 上野の諸嶺を眺め 南東
に八ヶ岳 富士 駒ヶ嶽(信濃)を觀る
御嶽に於て有名なる植物は 駒草とおになり 共に藥用に供
し登山者に販賣す 然れ共近年駒草は當嶽に絶えたるを以て

乘鞍 駒ヶ岳 八ヶ岳等に於て採集したるものを賣るといふ

三笠山

御嶽前山なり 遠くして之と望めは 形笠を覆ふか如し 故に
名とす

御嶽神社

嶽麓三岳村字黒澤にあり 御嶽を祀る俗に之を里宮さくらみやと謂ふ 縣
社にして大己貴命を祭る 本社 若宮 神樂殿 拜殿 神饌所
社務所 寶藏等あり 延長元年初めて此地に鎮座し 本社は至

徳二年木曾伊豫守家信の造營 若宮は天文廿三年木曾義康の造
營する所なり 舊歴六月二十三の兩日を以て祭典を行ふ 其
式頗る盛んにして 古へは流鏑馬やぶさめ 奏樂等の奉納ありしといふ
凡そ御岳に登らんと欲するも乃 潔齊七十五日六月十五日山に
登りしと云ふ

黒澤に郵便局あり 旅舎には 武井 田中 合戸あいごあり

○

しろ妙の雪のみたけのふもと路に

一むぶかきむ黒ざわの里

王 瀧

土地の廣淺こと本郡第一にして 山林鬱茂木曾谷中に冠たり
王瀧郵便局あり 旅舎には 瀧 松原あり
岐蘇古今沿革志に曰く

「此村古くは おのたけといふとそいつの頃より王瀧と書替へ
られしや 此村氷瀨の奥に大なる瀧ありて 水聲は聞くへきも
形は見るへからすと云ふ さすれは大瀧と書くへきか 瀧越村
の名此瀧を越ゆる事なるなり 大瀧の假名オホタキにて 王瀧
はワウタキなり 姑く疑を存す」

〇

青

嵐

ゆふ立の晴れても絶へず鳴る雷は

深山の瀧のおとにそありける

〇

ひさかたのみたけまうてのかへるさを

月に浴みゆく王たきの里

〇

ほととぎす鳴くこゑならで王瀧の

木ぬれ夜ふかくふみよむや誰

王 瀧 川

御岳より出つ 之を本谷といふ 其源に水簾あり 俗に百間瀑
布と名つく 黒澤に至ると西野川を合せ福嶋に於て木曾川に合す

岩戸神社

王瀧村上嶋に在り 巨岩壁立數仞の下 嵌空あり祠殿を建つ
岩側湧泉一脉潺々として絶へす 傳云ふ是御岳の別宮にして
黒澤の祠と同じと 毎年六月十五日諸人御岳に登るの時 祠官
前導せりと 村社にして國常立尊 少彥名命を祭り 天正八年
木曾伊豫守義昌の再建にかゝるといふ

氷ヶ瀬

福島町より御嶽道につき 三尾を經王瀧川よ沿ひて登ること六
里半 王瀧村字瀧越の東にあり 王瀧川の溪流此處に來りて潭
とあり 兩崖は絶壁峭立して密樹之を蔽ひ 岸上遙かに俯瞰す
れば 其色深碧にして藍壺あいつばを臨むが如し 徑路を下る事數十歩
にして急ち一條の長橋溪に跨るを見る 是れ氷ヶ湍こほりがせなり 是に
至りて道は愈々下りて愈々峻しく 未だ橋に到らずして巖徑絶
へ 梯と踏んで下れば碧潭已に脚下に在り 橋は兩岸岩腹の凹
低かる處を撰び 之に巨木を渡し板を敷き欄を設く 其構造雅
素にして俗あらず 實に谷中第一の壯觀といふも溢美の言にあ

らず 唯惜む深山の境行旅は客稀に人目に觸るゝ誠に少きを

○ 夏しらぬみたにの雪にまごふかな

その名もこふる瀬々乃白波

鞍坡瀑布

王瀧村宇瀧越にあり 絶壁れ下に懸り高さ僅かに三丈に過ぎざるも勢ひ奔馬の如く 水石相激し殆んど山壑を鳴動す 木曾中の諸瀑に冠たり 因て王瀧乃名ありとか 溪を隔てゝ北岸に奇岩怪石累々として重疊し老樹蒼鬱たり 樹根を踏み蔦蔓に憑り

下ること數十歩にして 始めて瀑布乃全形を觀るべし 其下は碧潭鏡乃如く 奇岩乃左右に秀づるも乃磊々として其數を知らず 眞に山間の一奇勝たる哉失はず 只だ地僻にして道嶮あるが爲め來り觀る者太だ稀なり

○ うべしこそみる目くらまの橋なれや

下照る紅葉あふがれもせぬ

瀧 越

王瀧村にあり 白巢峠を越えて 美濃國惠那郡加子母に達す

此地三浦氏の一族の住居し所 昔三浦大夫の裔にして三浦を氏
とす 昔和田合戦の時 和田乃族人逃れ来て三浦山に居る 是
れを三浦大夫と云ふ 開墾を業と居しが土地僻遠にして不便お
りしを以て瀧越に移ると云ふ 東鑑に 和田義盛戦敗の時諸子
弟皆死す 唯朝比奈三郎泰秀亡命至る所を知らず 此泰秀爰に
逃來り三浦大夫と稱せしならん 此人怪力ありて馬を背負ひて
瀧越に移るといふ 是れより其山に命するありと
三浦山は濃飛信三國の界也と云へは 今の三國山あるべし

木曾棧道

今の棧は上松驛の北半里駒ヶ根村字杵懸つかりにあり 慶安元年尾州
侯有司に命之兩端に岩石を疊みて橋礎となし 之に長さ五十六
間幅三間四尺の木橋を架せしめ 寛保年間重ねて修繕を加ふ
今存するもの是れあり 然れ共古へ乃棧道全く其位置を異にし
駒ヶ根村字立町にて 國道より左折し溪流に沿ひて山を登る
こと半里 懸崖對峙して自然の橋礎を爲す處 即其舊趾なりと
いふ 寛文の頃までは兩岸に鐵鎖の半ば腐蝕して残れるものあ
りしと云ふ

○

芭

蕉

かけはしや命をからむ葛かつら

○

後京極攝政

わけくらす木曾のかけはしたえくに

行末深かき峰の白雲

○

讀人不知

あやふさは名のみ残りて今更に

渡るに易き木曾のかけはし

○

淺井列

いにしへの名のみとめて大御代は

わたるにやすき木曾のかけはし

○

青嵐

雨すぎし木曾の山路の旅人は

虹乃かけはし渡りてぞゆく

○

かけはしのかげの朝霜消えおくに

はやも日暮るゝ木曾の山みち

○

嵯峨の屋主人

山より山のかけ橋を

おり登りゆく木曾の旅

巖けはしく水きよく

心の塵を洗ふらん

懸橋や命をからむ蔦桂と

詠みし山路のかけ橋は

影さへあけれ路の邊に

今も苔むす芭蕉の碑 世に永遠とこしへの名をとめて
千歳乃雨にさうさるゝ

上松

駒ヶ根村に在り 中仙道の驛次なり 福島町を距る二里 近邊
良材を産する事木曾第一なり

上松郵便電信局あり 旅舎には さか重じゅう 田政 萬屋等あり

〇

青 嵐

白妙しろたきのみかげ岩やまところどころ

赤土くづれ松生ひかゝる

〇

超々來る南信萬山の山 雲影樹色せんかん いぶか仙寰を訝る
急ち驚く谿間瀆笛の聲 夕陽烟を掠かすめて亞壁あへきざん燦たり

駒ヶ嶽

中仙道上松より四里八町 六時間にして絶頂に登り得 木曾伊
那兩郡の間に跨り 地籍は新開村 駒ヶ根村 上伊那郡宮田村
の三村に属す 高さ七千八百〇八尺 山は凡て花岡岩にして
木曾街道の景物に愈々跌宕を倍す 其状恰も屏風を立てたるが
如く 所謂三十六峰八千谿と稱せらる 其間翠然たる偃松は雪

の如き花岡岩乃上に匍匐し其景畫も及はず 頂に神社あり 此
所より四望努んか北に立山の連山 鎗ヶ岳 妙高山 戸隠山
飯綱山 善光寺平 松本平を雙眸に收め 北東に向へバ千曲川
の平原を隔て 白根山 淺間山 碓氷嶺 荒舟山 信濃 上野
武藏 甲斐境上の群嶺を認め 東に八ヶ嶽 甲斐の駒ヶ嶽 鳳
凰山 白根山を看次で萬仞に芙蓉峰を仰ぎ 南は天龍の溪谷油
畫の如く 遠江の秋葉山 叅河の鳳來寺山を看 漸く西より北
せは美濃の惠那山 信濃の御嶽 加賀の白山長揖し來る眼界
壯宏 畫師 詞客 高士以て登臨するに足る
且つ此山は異種珍奇に植物に富む 駒草 おにく 御山碗豆

白鮮齋はくせんざい をさば草等は其最も有名のもれ されは植物學者にと
りては最も有益乃處とす 豈夏季賽者さいしやの登山に價するれみあら
んや

○

青

嵐

駒がぬの峰のしら雲むら消えて

春は日ましにはひ廣これり

美

駒ヶ嶽(信濃)に峯頭 翠然たる偃松ハヒマツは 雪の如き花岡岩
れ上に匍匐し 翠は白に抹し 白は翠を粉す (風景論)

寢 覺

中仙道上松驛の南八丁にあり 茶店多く皆河漏子ツバキリ(俗名蕎麥截)を嚮く 此地れ名物とあす 旅舎には 越前屋 田勢屋等あり

寢 覺 の 床

駒ヶ根村上松驛を距る南八丁寢覺の里にあり 木曾川れ急流此に至りて迫り 其幅二三間に狭まり 奔湍激して花岡岩を浸蝕し 或は瀬とあり 潭とあり 其水深を知らず 兩岸奇岩怪石 重疊起伏し突兀柱れ如きもれあり 平坦疊の如きものあり 大

あるは數十丈 小と雖も一二丈を降らす 各々形状によりて名あり 其西岸にあるものを屏風岩 硯岩 烏帽子岩 蓮華岩 釜岩 廻岩 浦島太郎の釣舟石等とし 東岸にあるものを 腰掛石 象石 獅子岩 床石 葛籠岩等とす 奔湍激して岸を噬み水聲丁々散して白玉とあり 風光爽快誠に木曾山中第一れ奇勝あり 俗に此地と以て浦島太郎が釣を垂れたる古跡なりと言傳ふるは 弘治年間三歸翁なる者 此地に閑居して釣魚の樂みをなしけるを見て 浦島と綽號し 後終に水江みずのゑの浦島太郎の事に附會せしものなるべし

○

烏 丸 光 榮

たひ枕かり寝ものうき夜の夢の

寝覺にかわる松風の音

○ 近衛家熙

谷川の音には夢も結ばじを

○ 寝覺の床とたれ名づけけむ

青嵐

玉くしげ明けてうれしくあるものは

○ 寝覺の床の山ざくらばあ

あがめ入るぬざめれ床はあかなくに

はや日暮らしれ聲を聞くかな

仙人床 釋敬雄

釣倦仙人枕石眠 覺來三嶋路茫然

顔華空去東流水 唯有塞崑生紫烟

臨川寺

寢覺の床の東岸にあり 禪宗妙心寺派に屬し寢覺山と號す 中

仙道寢覺の茶屋より降ること一町にして境内に達す 本堂 客

殿 方丈 辨天堂等あり 本堂には開山活山和尚ねんぢぶつ念持佛たる

釋迦如來を安置し 辨天堂は尾州第四世圓覺院殿に建立せしも

のなまどど 又姿見すがたみの池 芭蕉翁の句碑等あり 其左方は懸崖
直ちに木曾川に臨み 俯して寢覺の床を瞰望すべく 四顧また
風物に乏しからず 木曾八景中ある駒ヶ嶽の夕照 風越山の晴
嵐等は殊に其佳あるもれあり

○

芭

蕉

晝顔にひるぬせうもの床の山

滑 川

駒ヶ根村寢覺の南にあて 中仙道此河に架せる橋を滑川橋と云
ふ 水源地 駒ヶ嶽より流出せる花岡岩水に洗われて 妻角を

失ひ 轉々散亂せる一段の風光を添ゆ

風 越 山

駒ヶ根村字萩原にあり 古へは驛路のあてし所 風越の晴嵐は
木曾八景の一あり

滑川は南寢覺より東南に高く見ゆる草山にして 處の者は カ
サコ山と云ふ 滑川橋より一丁余といふ

○

藤 原 家 經

風越の峯れ上にて見る時は

雲も麓のものにうあてける

〇 源 顯 仲
手向にも結ひて行かん風越の

すそ野の尾花穂に出にけり

小野の瀧

駒ヶ根村上松驛より 須原驛に到る途上滑川は南方途の左側に
あり 高さ百尺 幅六尺 溪水風越山より發し 花岡岩を穿ち
來り 斷崖に懸りて瀑布をなす 水色昌明往來は人足を停めざ
るもれかし

〇 烏 丸 光 榮

つま木こる小野の名しるき瀧なれや

山かすかなる中に音して

〇 昨夏奥州の俳人甲山岐蘇路を過ぐ 漫遊漫録に小野の瀧を記
して曰く「左に一飛瀑あり 木曾路唯一とあす 數尋の崖を
下り大佛の肩の如きに激して 散飛銀簾に似たり 亦一奇
名ありや否や 若し無くば 大佛瀑とも名くべし

〇 青 嵐

あし曳の山のはざまのいわがしら

けづりて落つるをのゝたきつ瀨

○ 入日さす紅葉のがひに霧はれて

瀧のしぶきに虹立ちわたる

立町

上松より須原に至るの間 駒ヶ根村字萩原にあり
旅舎清水屋あり

○ 古へは木曾のかけはし跡絶へて

たれたちまちの名れみ残れる

須原

中仙道驛次にして 上松より三里 大桑村にあり
郵便局あり 旅舎には 住吉屋 櫻屋あり
名物花漬を齧ぐ

○ 甲山

木曾山をかくせあらはせ五月雲

○ すばらしいそは須原れさくら

漬けて沸湯にぬゆの中に咲く

定勝寺

大桑村字須原驛にあつて 臨濟宗にして淨戒山と號し 京都妙心寺に屬す 嘉慶年間の草創に係り木曾右京太夫親豊の開基 香林和尚を以て開山と爲す 此寺本河岸に在り 文祿四年乙未八月 洪水流凶 今其地を呼んで寺中嶋と曰ふと 其後石河備前守光吉之を此地に移す 堂宇には本堂 庫裡 方丈 樵月齋しょうげつさい等ありて 本堂には釋迦如來の象を安し 寺寶として木曾家累代の寄附狀 兆殿司筆十六善神の圖 狩野元信の筆達摩の圖 其他數幅の畫圖を藏す 境内に源義在の寄進にかゝる古梵鐘あり 寺域方一町餘にして 竹林之を圍み景致頗る深邃なり

長野

須原は南中仙道大桑村に在り 驛の南今井澤と云へるあり 山頭に今井四郎兼平の城址あり 其麓に古關門址あり 里人呼んで關山といふ

殿

大桑村に在り 長野とは木曾川を隔て相對す 岐蘇沿革志に曰く

此所谷中第一の日向溫暖にして膏腴の地なり 街道へは川を隔て、用心よければ 義仲公滅後連枝方此所に隠れ坐しける

にや 里語に主人を旦那と云 木曾家を屋形様 或は殿と云
しなれば 住玉へる村なればにや 殿田 殿畑 殿栗 等の
名諸所に残り 此所長野とは大川隔てたるはかりなれば
鎌倉出仕以前は 殿村長野塾居の地ならむ 根井大彌太 楯
六郎 樋口二郎 今井四郎 池口五郎 行腰十郎其他名士の
子孫住せりとて 苗字を家名所名として残せるあり

野 尻

長野の西中仙道の驛次にして 大桑村に在り 古野路里に作る
驛の南に野路里館址あり

木曾川を隔て、西柿其に至るへく 南與川に至るべし
旅舎に木戸 加納屋あり

與 川

一に横川に作る 三富野驛の東に在り 昔より月の名所とあす

○

うち日さすみやこの人に見せばやな

秋の夜川の月のひかりを

三 留 野

讀書村よみかきに在り 古御殿に作る又三留野とも書す 中仙道驛次なり
と 傳へ云ふ 木曾開道の時始めて官舎を建られ 國司官吏乃
休息の殿となれり 故に御殿と云ふと 又往時木曾氏飛驒路を
拒がんと欲し 砦を田立山に構へ 又館を此に築き 其族をし
て之れに居らしむ 三富野は則ち御殿の謂なり (御殿殿と字重
なる故に三富野と改めたるありと) 驛は西に一高阜ありと呼んで
城山と云ふ 是れ古烟敦の址あり
郵便局あり 旅舎には 松屋 中彦 稻屋あり

妻 籠

中仙道の驛次にして 三留野の南一里餘吾妻村に在り

郵便電信局の設けあり 旅舎 松城屋

光徳寺は臨濟宗にして 妙心寺に屬し琉璃山と號す 元和五年

山村良候の建にして 悟溪和尚を以て開山となす

驛の東に妻籠城址あり 天正十年木曾義昌の築々所山村良勝を
して之に居らしむ

蘭

吾妻村に在り 妻籠より大平街道の通する所にして 檜笠の産
夥し々 毎年五十萬蓋を製造すといふ

大平峠

縣道にして 木曾より飯田に通するの要路なり 妻籠より分岐して 蘭 廣瀬を經五里餘にして 下伊那郡飯田町に至る

田立

妻籠より 一里二十四町 濃州界に在り 箭立嶽といふあり 其尖箭筈の如し 故に名つゞ 山頂三瀑布あり直下數十丈 遠く之を望めば垂簾の如しと 一里四町にして 岐阜縣惠那郡坂下村に達す

山口

田立より一里 妻籠驛より二里十三町にして達す 美濃境木曾川の東岸に在り 田立山口は紙を産す 然れ共未だ稱すへ姿佳品なきを遺憾とす 今や 妻籠より木曾川に沿ひて 山口新道の開鑿せるあれば 交通に便あり 美濃惠那郡坂下へ二十七丁 落合村へ二里三町にして達す 旅舎に吾妻屋あり

○ 山口のはざな紅葉に入日さし

田立乃わたるむらさめは降る

馬籠

西筑摩郡は最南神坂村にあて 中仙道驛次よして 妻籠驛より
 馬籠峠を越へ 一里三十四町にして達す
 驛は西に丸山城址あり
 馬籠郵便局を設け 旅舎に 扇屋 吉田屋あり
 一里七丁よして 岐阜縣惠那郡落合村に達す
 今や山口新道は開鑿せられしるるを以て 妻籠よりは道路修繕
 意は如くあらず 險坂多し

○

青

嵐

つまこめやまこめは里おわれ來れば

八雲立つ根よあまほととぎす

木曾は古道十一驛を経て 今宵馬籠は

驛は宿す 顧みれば白雲漠々 路杳々

甲

山

五月雨や古人個様は装は雨

ぬるくとも木曾は雨なると五月雨

雨古き十一驛や時鳥

○

芭

蕉

送られつ送りつ果は木曾れ秋

○

甲

山

信れ雨濃れ嵐や夏衣

湯 舟 澤

神坂村に在り 木曾の最南信美の境に接す 下伊那駒場驛より
園原を經 神坂峠を越へて 美濃の國惠那郡落合に通ずる途に
當る

徒然草の著者として有名ある 兼好法師の舊跡にして 馬籠驛
よと北に入る一里許にあと 冷川の傍 老杉の下に碑あり 兼

好塚の三字を刻す 兼好は和歌の達人 後宇多院の御代 北面
の武士にて 佐兵衛佐に任ぜられしが 帝崩御の後 世を遁れ
來り しばし此地に隠れ住み

思ひたつ木曾の麻衣あさくののみ

染めてやむべき袖の色かは

と詠みしが 或時領主此地に狩すとて 立騒ぎければ

こゝも又浮世ありけりよそながら

思ひしまゝの山里もかな

とよみて飄然として 立ちざりけるとなむ

里人訛りて 猿猴屋敷又は猿屋敷と呼ひ 且毎年三月十五日

酒饌を供へて 其靈を祭るといふ

神坂越

木曾伊那郡界に在り 園原より湯舟澤に通ずる峠にして是木曾の古道なりと 或は御坂とも書す

○

鳴長明

吹のほる木曾の御坂の谷風に

稍も知らぬ花を見る哉

○

千惠法師

谷風よ雲こそればれ信濃路や

木曾の御坂の夕立に雨

○

權中納言長房

信濃路や木曾に御坂乃小笹原

分行く袖もかくやつゆけき

先よ木曾路を出て鶯は聲うとくなり今また

御坂み來り頻りみ鶯は鳴々を聞きてよめる

淺井列

鶯はおくり迎へてゆくさ來さ

いづる山口かへるみさか路

御坂嶺よ雨よあふ 全 人

さらでたに御坂は路はあれよしを

雨さぬればゆきさぞむつろふ

木 曾 風 光 終

さらでたに御取れ略はあれよしを
雨さるればゆきをわつるふ

本 會 風 光 終

商 紙 外 内 ● 刷 印 種 各

製 品 は總て意匠脱俗にして 鮮麗速成を期す

價 格 は必ずしも貴きを願はざれども 強ら安を主張せず

帳 簿 は官簿 商用 其他を擇ばず 租式 洋式 折本

秩入等に至る迄御好みに應ず

發 賣 品

手形用紙 約束爲替 兩種とも最新適法の式を撰み調製

せし優美の手形用紙あり

名勝畫はがき 高勝優雅なる 伊那 木會の名蹟を天下に紹

介するに足る

寸翰用箋 座有必須且ポケット入に適すべく 簡捷な

る文明的の用箋たり

醫 家 處 用 處方録 投劑録 處方用箋 診斷書 傳染病届の

用紙は常備して國手の御需に供す

信 濃 會 發
國 資 會 光
飯 會 光
田 社 堂
町

告 廣

木曾 福嶋

諸官衙學校 役場御用達 **諸式用達商會**

營業課目

- ◎ 書籍
- ◎ 紙類
- ◎ 文房具
- ◎ 理化學器械
- ◎ 官署學校用品
- ◎ 印刷物取次

右種類は勿論此他と雖も御用品一切隨時隨調御用辨可仕候

木曾風光附録

木曾八景

木	駒ヶ嶽の夕照	與川の秋月
曾	風越の晴嵐	小野の瀑布
風	寢覺の夜雨	棧道の朝霞
光	御嶽の暮雪	徳恩寺の晩鐘
九八	即ち是れ	

木曾の五木

木曾の山林到る處良材に富み 木曾五木の名世に著はる 所謂

木曾風光附録

木曾八景

駒ヶ嶽の夕照	與川の秋月
風越の晴嵐	小野の瀑布
寢覺の夜雨	棧道の朝霞
御嶽の暮雪	徳恩寺の晚鐘
即ち是れ	

木曾の五木

木曾の山林到る處良材に富み 木曾五木の名世に著はる 所謂

木曾風光附録

五木とは

檜ひのき 榧さわら 榿ねぎ 明檜あすひ 榿まき 是れあり

五木の説明

一 ねすこは 又くろべとも稱す
 一 あすひは 又あすなる 或はひばと稱す
 一 まきは こうやまきとも稱す
 一 此等は皆四時緑葉を着くる樹木 即ち常盤木にして 所謂常盤木とは葉の開張と 凋落との間に間斷あきを云ふ
 一 植物學上何れも松柏科類に属す
 一 今此等の性質を表示すれば差の如し

五木	俗字	漢字	葉	樹皮	材
ひのき	檜	扁柏	鱗狀、其端鈍し	淡黒赤色	黄白色、微赤
さはら	榧	花柏	鱗狀、其端尖る	淡黒褐色	黄白色
ねすこ	榿		鱗狀、三列、扁平	黒赤色	其心淡黒
あすひ	明檜	羅漢柏	ねづこに似て大	褐赤色	白色、微黄
まき	榿	金松	線狀、長三四寸	黒赤色	白色、微黄

一 檜と榧との區別

檜は葉の先鈍にぶきも 榧は鋭すどくして 莖より分離てきはき 故に手觸り悪し、
 尚檜は榧よりも果實大に 枝も折れ易く 樹皮もまた粗なり

一 ころやまきとくさまきとの區別

楡即ちころやまきは 紀州高野山に多きを以て名づく 場所に依ては くさまきと稱して 庭園に栽培すれども是れ誤りなり 今二者の葉の相違を擧ぐれば

ころやまき 葉は長線狀にして 數多一所より生じて 茶筌

くさまき 葉は披針狀にして 互生す 果實は肉質にして 狀をなす 果實は松毬の如くにして大なり

小なり

五木の効用

一 五木は 皆建築 器具及び船艦橋梁等に用ひ 最も需用多き

ものにして 能く濕氣に堪へ 容易に腐蝕すること無し 是れ屋根板或は橋材等として 長久に保存する所以なり

一 檜は烈しく磨擦すれば 熱を起し火を發す 故に此名あり

我國上古の燧具は此木を以て作れり 伊勢大廟 出雲大社の如き 今尙此燧具と使用して 神火を取ると稱す

檜材は樹木中の最上なるものにして 宮殿或は高尚なる居室を作るに用ゐる 又剝いで附木 曲物とし 編んで檜笠を作る 樹皮は屋根を葺く可く 之をひはたぶきと稱す 又紉つて檜繩とし 或は敲いて船茹とす 心はひでと稱し 樹脂を含んで燃ゆ易く 之を楊枝として用ひれば 能く齒を養ふの效あり

りと云ふ

一ねづこは其材の心部鼠色なるが故に名づくこと 建築並に器具
用として雅致あるものとす 且つ音響を傳へざるより室内の
聲の漏るゝを防ぐに良しと されば徳川幕府の時公儀の密談
所の建築には 加州侯より献上せるねづこの材を用ゐしと云
ふ

木曾の森林

木曾の森林は天下第一と稱せられ 而も到る所良材に富む 現
時其大部分は帝室御料林たり 御料林三十四萬八千五百五拾九

町步餘 就中王瀧 駒ヶ嶽 大桑 讀書の諸村に在るもの最も
著名なり

木曾の山林の良材に富めるは 蓋し偶然にあらず 維新前に在
りてと 種々の方法を設けて之を保護し 叙上木曾五木は 停
止木と稱し人民の自由に伐採し得ざりしものなり 維新後と雖
も御料地となり 其部分丈は濫伐を免れ 今日日本の森林と稱
せらるゝに至る

殖林の事業 獨り樹木其物が生業に對する直接効用のみならず
近時理科學の進歩と共に工業に對する間接利用となり 且つ水
源を涵養し 洪水の害を未發に防ぎ 氣候を調和し 風致を高

雅からしむる等單に自己一人の利益のみに止らず、公共の利益たるを思はゞ、寸時と雖も忽諸に附すべからざるや明かなり。されば近年至る所殖林事業に意を傾注するに至り、縣費を以て苗圃を設くるもあり、本郡亦郡費を以て木曾山林學校の建設を見るの氣運に至れり。豈慶すべきにあらざるや、願くは其功績の社會に影響するの偉且大なることを。

神宮御造營の宮木曳を見侍りて 淺井 列

木曾山の檜原か杣に伐りいて、

内外のみやにみや木ひくなり

木曾風景論

日本には火山岩の多々なる事、火山岩の多在するは、日本の景色をして、純美ならしむる主原因たること、日本の山嶽中火山岩に次ぎて、高邁爽快なるものは、花岡岩の山嶽なることは、一度日本風景論を繙きしもの、悉く知了する處なるべし。されば風景をして純美ならしめ、高邁ならしむるものは、火山岩の山嶽にあらざれば、花岡岩の山嶽たらざるべからず。本邦火山岩の蟠屈する所は何處ぞ、本邦花岡岩の最高點は何處ぞ、本邦有數の高度を示せる御嶽は、安山岩(富士岩)にして即ち火山岩なり、中國山脉は本邦に於て花岡岩の最大面積を有す。

るものにして 之に次げる面積を有し 本邦花岡岩の最高點を示せるものは實に木曾山脉にあり 駒ヶ嶽山脉にあり 火山岩なる御嶽 花岡岩なる駒ヶ嶽の中間一帯木曾溪谷風景の純美高邁ならざる理あらんや

宜べなり 木曾地方景象の雄大壯嚴なる所謂

そもく木曾の路は 大むね 岨のかけじさかしき山坂にて ほかなる溪あひ 奥深き山里のみにて 見上ぐれば 千尋のきり岸 青く聳へて空をかくし 見下せば 一筋の溪河 白く漲りて玉をちらし あるいは 木こりの通ふ細路 嶺より みねにめぐり あるいは 筏ををろす流溪よりたにに入り 魂

を驚かす水の響 心をさむからしむる巖の形 かの唐人の山は人の面よりおこり 雲は馬の頭にそひて生ずといひけむも かゝる所にこそはと思合はさる しかのみならず 年經し林に風おこりて 鳥の聲ものさびしく 古びたる石に霧まといて 瀧の音かそけきなど 言盡すべくもあらず かゝるけしきは 世に大かた稀なるを この道をゆきかふ人は 常になれてさる所としも思ひたらず 豊後の耶馬溪 上野の妙義山などを ことにふれてことごとくしくいひ出でつゝ 二なきものに思ふもすくなからず それはた世の常の所には ありざめれど たとへば扇などにかきたらむ繪ともいふべく

や、このさまは、そのすがた大にして、たけたかき屏風、横長き巻物とみるこゝちなむせらるゝ、心ある人は誰もしりたらしむことながら、事の序に驚すになむてふもの、更にまた

我古代の詞人の好んで紀行を作ること、先第一指を木曾路にとめたり、木曾路に遊ばざるものは、風騷の客たる資格を備へざるもの、如く然りき、第二は松島、出雲、大和、西京の如きは、第三第四以下に位せり

出雲は我國の埃及なり、大和は我國の希臘なり、西京は我國の羅馬なり、總てに於てしかく類似するを見る、こゝに遊ぶ

懐古の客、其神殿を拜し、殘壘破壁を見、繪畫彫刻を見る、黯然として、消魂せざるものなし

しかれども、これ等は悉く歴史的連想の生むところにして、單に自然の風物の然らしむるに非るなり、木曾路は我國の瑞西なり、ひとり古代詞客の遊跡を踏みて、懐古の感に打たる、のみならず、危岩怪石、幽花啼鳥、青山白雲、滴泉奔湍、悉く詞人文客をして、寂しき心を起さしめざるものなし、松島善からざるにあらずと雖も、一目にして盡くすべき變化の妙に乏し、ひとり木曾路にいたりては、千態萬狀、目見て心會すべく、口得て傳ふべからざるなり、しかも地僻偏に失せ

ず 一日の行に倦みて 旅亭を訪へば 風呂は温にして 勞
 を慰すべく 酒は濃にして詩思を誘ふべし 木曾路のごとき
 は 實に日本第一の景勝と稱するに足る 余曩に妙義を賞し
 たり今にして悔ゆ 松嶋 妙義 橋立 宮島の如きは俗客の看に
 値すべし ひとり木曾路は心あるものゝみ其味を嘗むべし
 終宵枕をうつて泣き明かぢるものならでは いかでかばんの
 味を知るべき 千峰萬壑を踏み 終日白雲と伴ひ 流水と語
 り 巖に臥し 花に枕し 幽寂の念に涙潜然として涌くもの
 に非れば 山靈水神はこれと手をとりて語らざるなり
 の壯語を現出し來らしむるもの

若し夫れ春夏の候 萬山の生物活氣鬱勃として映出するや 翠
 色は滴らんとし 緑淨は流れんとす 殊に贊美惜く能はざるも
 のを 暮色の靄然として 山色紫衣に霞彩せらるゝの壯景とす
 豈單に春夏綠陰清風の候のみならんや 一度西北風の微に吹き
 初め 霜氣漸く動き 爽籟の溪谷を徹透するや 萬山の紅葉
 宛然天女の雲錦を曝らすが如き 所謂瀟洒と美とを兼併するも
 の是れを秋季の大觀と爲す
 然れば木曾路の景象や敢て假裝せず 嬌飾せず 鬱々萬古實に
 化工の有の儘を展開せるのみ 彼の人工の小にして奇なるに非
 ず 實に自然の偉にして靈なるもの」 終

明治三十七年八月十五日印刷

全 年八月廿五日出版

編輯者 矢澤華嶺

長野縣西筑摩郡福嶋町三五三番地

發行者 神村律

同縣同郡同町二九二番地

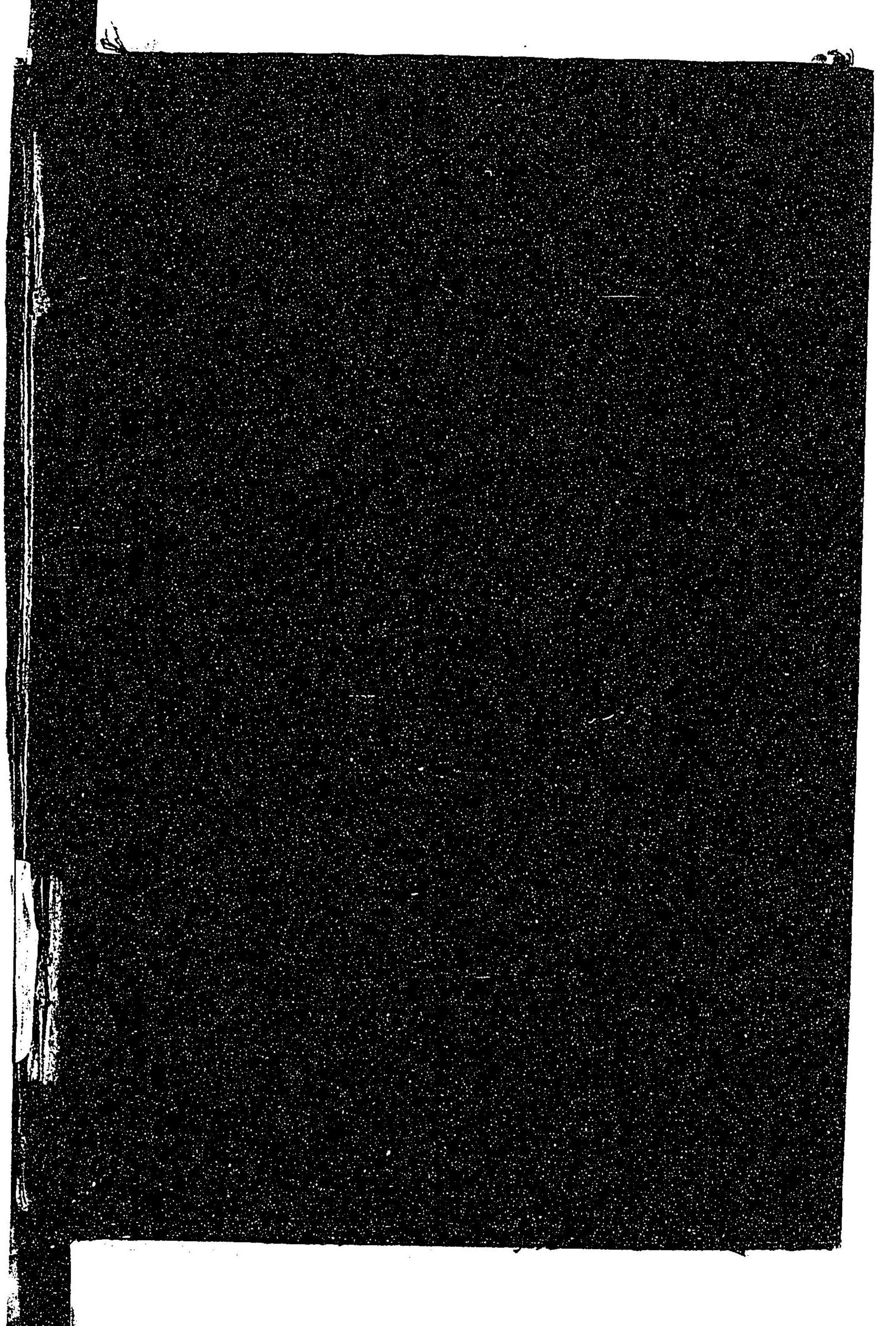
印刷所 發光堂

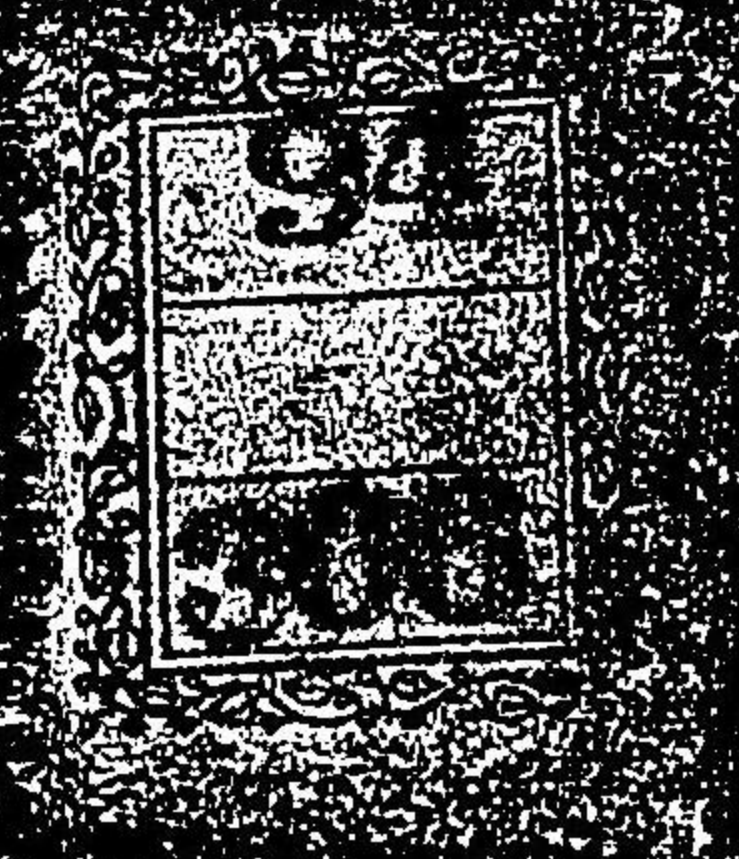
合資會社

同縣下伊那郡飯田町六五八番地

10/11/88

94
306





M

9
3

024804-000-8

94-306

木曾風光

矢沢 華嶺 / 編

M37

ADC-2086



